テイルズオブテニヌ

ぴーまん律

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブテニヌ

【Ｎコード】
Ｎ７７１２Ｃ

【作者名】
ぴーまん律

【あらすじ】
病気の治し方を探すため、主人公は旅に出るのだが――。

1．プロローグ（前書き）

この小説を読むに当たっての注意事項。

・テイルズのような世界観でテニプリキャラを動かしてる感じのパラレルです。
・作者の好きなキャラしか出てません。
・接点なくても絡みます。
・原作で接点のないカプは成立しません。
・蔵不二（白不二）、不二受けが苦手な方はご遠慮下さい。
・真面目にシリアスなＢＬとして書きます。
・関西弁がたまに山口弁になってたらすみません。
・ぶっちゃけネタです。

以上を踏まえた上でどうぞ。

主な登場人物

白石蔵ノ助
性別：男性
年齢：１７歳
階級：剣士
属性：クール攻め
本作の主人公。テイルズ史上今までにない関西弁主人公でもある。
銀髪紅目のアルビノの設定だが、本編ではどうかは不明。
１０８式を極めた石田銀の弟子だが、病に侵されている。

不二周助

性別：男性
年齢：１６歳
階級：治癒士
属性：誘い受け
本作のヒロイン。テイルズ史上初の男性ヒロインである。
毒に侵された身体を治すために治癒術を覚えたが、役に立たなかったので、解毒方法を探すために旅立った少年。

阿久津仁
性別：男性
年齢：２１歳
階級：召喚士
属性：ヤンデレ攻め
太一を心配し、一緒に旅に出る。
ショタコン気味で、太一が好き。

壇太一
性別：男性
年齢：１２歳
階級：踊り子
属性：純情ショタ受け
村のアイドルであり、儀式の時に活躍していた踊り子。華麗な姿に人々は魅了される。
両親が毒に侵されており、蔵ノ助達の旅に付いて行く事に。
阿久津に憧れている。

観月はじめ
性別：男性
年齢：３６歳
階級：吸血鬼

属性：敬語攻め
街を騒がす存在で、人を襲っては血を吸っていると噂されている。老いないため、見た目は美しい青年だが、思い通りにいかなければキレる。

不二裕太
性別：男性
年齢：１５歳
階級：治癒剣士
属性：天然ツンデレ受け
兄の毒を治そうと治癒術を懸命に覚えたが、ある日兄を失い、観月を盲信して従ってしまう。

1．プロローグ

数十年前、とある学者の研究所から、名もない原因不明の菌が流出し始めた。

その菌とは、特殊な液体が気体として蔓延したもので、それはやがて世界中に広がり、人々は絶望させられた。

それも様々な症状を巻き起こす。
人々はこれを『不治の病』だと言い、感染を恐れた。
人によって症状や形は異なるが、感染した者には、身体の何処かに必ず奇妙な紋章が刻まれるというのだ。

そんな中、人々は何かに縋って生きて行くために、『キリハラ教』という宗教を盲信して行くのだった。

これは、その毒に侵されてしまい、腕に紋章が刻まれている少年の物語である。

2．変わってしまった現実

キリハラ教会の神父の弟子である白石蔵ノ助は、銀髪のアルビノだということ以外は、並の人と何も変わらない普通の少年だった。

毒が流出され、三十年ほど経った頃に生まれ、現在は十七歳である。

蔵ノ助が生まれてから、世界の国は一つしか残らなくなった。

それが蔵ノ助が住む、テニヌ国という国だ。

ここは同国の四天村。

他の村や町と比べればキリハラ教が盛んではないものの、身寄りのない蔵ノ助は教会の神父である石田銀に拾われ、他の弟子達と共に暮らしている。

そんな平凡な生活の中、蔵ノ助は病に倒れてしまったのだった。

「俺は死ぬんやろうか……」

寝床で絶望する蔵ノ助に、１０８式を極めた銀は治癒士を連れて来てくれると言ったものの、今の時代だ。
治癒士なんて珍しく、魔術を使える者だって減ったのに。

それでもどんな薬草も効力を見せないとなると、それに頼るしかなくなったのだが。

案の定、探しに行ってくれた銀は、一週間以上帰って来ない。

あぁ、俺は死ぬんだ。
キリハラ教の聖書を丸暗記した、天才の俺が……。
教会の神父になる筈だったのに。
剣術だって、最近やっと技を修得出来たばかりなのだ。

義理の弟だが金太郎を残して死んでしまうのだ。
美人薄命とは、まさにこの事なのだろう。

ポエマーになった気持ちで天井を見上げていると、茶髪の美少女を連れた銀が戻ってきた。

やっと俺にも希望の光が……！

「これがワシの弟子だ」

銀はそれだけ言うと、少女に蔵ノ助を頼む、と告げた。

可憐なその少女は、碧眼を瞬かせ、蔵ノ助の腕を見る。

なんて可愛い子なんだ。

俺が元気だったら、真っ先に仲良くなれただろうに。

「これは……」

少女にしてはやや低めのクールな声をした彼女は、目を見開き、蔵ノ助の腕を見つめて震えた。

「どうかしたんか？」

銀が顔を覗き込まなくても、蔵ノ助には分かった。

もう治らない病気なんだ。

「――これは僕の治癒術では治りません」

僕？　――まぁ、それはいいとして。

やっぱり治らないんだ。
でもここで潔く諦めては、今まで何のために生きて来たのかを問いたくなる。

咄嗟に身体を起こし、その少女を見つめた。

「なぁ、他に治る方法ないんか？」

しかし、彼女は目を伏せ、首を横に振る。

「原因不明の菌が流出してるの、知ってますよね……？」

知っている。
でも、この村は感染率は遥かに低い筈だ。

確か、あの『不治の病』に罹った人物は、この村では数人しかいないのだ。
それも村の踊り子の両親で、彼らは他の町から帰って来てから罹ったのだ。

だからこの村にいれば、感染の危険性が少なくなる――生まれた頃から、そう信じてきたのに。

「蔵ノ助さんは、その菌に侵されています。
あれは何をしても治りません……解毒方法を知るために、僕は旅をしているんですから」

ある研究所で流出した、原因不明の菌。

このペスカ星という惑星に、僅か一つの国しか残さないほど、じわじわと生物を痛め付ける菌だ。

でも、もし見つかれば――俺は生きられるのでは？　罹ったからといって、すぐに死ぬ事はないのだ。

「そうか。それなら仕方ない。迷惑掛けたな」

「いえ。これで僕が旅をする理由が、またひとつ増えましたから」

銀と少女が会話を交わすのが聞こえる。

少女が最後に微笑んで、背中を向ける瞬間が見える。

身体は重いが、どうにかしたい。

どうせ死ぬなら、何か手掛かりを見つけてからの方が――。

「待ってや！」

マロンブラウンの髪をふわりと浮かせ、少女の青い瞳が向けられる。

無理かも知れない。

でも、それ以外に方法はないのだ。

「俺もその旅に連れて行って欲しい。
無理にとは言わんけど……どうせ死ぬなら、何か役に立ってからのがえぇやろ？」

意味があるのかないのか、少女は沈黙を置いた。

そして再び笑うと、
「いいですよ」

と快く返事をくれた。

蔵ノ助の提案は銀も許してくれて、かなり急だったが、明日の朝には旅立つ事になった。

それまでは少女もこの村に泊まるのだが――。

「俺、家族や友達に挨拶しに行くから」

日が沈むまで、蔵ノ助は友達、それに家族に義理の母と弟にも挨拶しに行った。

出発は明日の早朝。

身体はかなり重いけれど、あんなに可愛い少女が一人旅するのだから、俺がへこたれてどうするんだ。

そう思いながら、最後の友人の所へ赴いた。

そこへは何故か少女も付いて来たかったようで、蔵ノ助を見上げて「同行させて」と言ったものだから、どことなくテンションが上がる。

「なぁ、名前何なん？」

「不二周助だよ」

「え、男？」

「そうだけど……」

少女だと思っていた治癒士は、本当は可愛い男の子。
それでも可愛いからいいや。
……と、蔵ノ助は少し浮かれ気味だった。

それだけの会話を交わすと、間も無く友人の姿が見えてきた。
そこには村の踊り子が一緒にいる。

「どうした？」

友人の名は、阿久津仁。
少し前にこの村に訪れたばかりだが、すんなりと友達になれた不良青年だ。

彼は蔵ノ助と違ってアルビノではないが、自身の意向で銀に髪を染めているらしい。

「いや、偶然太一と会っただけだ。テメェ、俺に何の用だ？」

少し喧嘩腰なのはいつもの事で、怒っている訳ではないようだ。
周りは彼を怖がるが、蔵ノ助からすればそんなに大した事はない。

「俺、例の不治の病に罹ったからな。
明日からこの村を出て、この治癒士（ヒーラー）さんと治す方法を見つける旅に出るんや。
それで、挨拶していこうかなぁと」

かなり簡潔に事情を述べた。

急だが、俺にはこれしかないんだ。
今まで挨拶した人達のように、分かってくれ――と心の中で言う。

「ヒーラーさんですか！　ボクはこの村の踊り子の、壇太一っていうです。
ボクもその旅、連れて行ってほしいです！」

可愛らしい声を上げ、まだ十二歳の壇太一という踊り子は、目を輝かせてヒーラーの少年にそう訴える。

踊り子は村の美少年が何人かで祭を盛り上げるためにいるのだが、太一の場合は特別村人からの支持が熱く、熱狂的なファンがいるくらいだ。

それくらい人見知りもせず、可愛らしい少年なので、阿久津も唯一可愛がっているようだ。

そんな太一の両親は、蔵ノ助と同じ病気に侵されている。

「ご両親の許可を取って、明日の早朝でいいんなら、教会に来て」

周助は優しく太一の頭を撫で、否定はしなかった。

だが、あんな年端の行かない少年を旅に出してもいいのだろうか。
確かに太一には兄弟がいて、両親の介抱はその子にも任せる事は出

来るのだが――。

「だったら俺も行く」

急に阿久津が言い出した。

「分かりました。この子に言ったように、明日の早朝、教会に来て下さい」

あまりに急過ぎはしないだろうか。

だが、旅を決めるのは周助であり、蔵ノ助ではない。

二人はそうと決まれば、散り散りになってそれぞれの家へ帰って行った。

「もう帰るの？」

踵を返す蔵ノ助に、周助が首を傾げる。

彼が男なら、同じ部屋で寝ても構わないだろう。

「あぁ」

がらりと変わってしまった現実に、蔵ノ助はそっけない返事を返した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7712c/

テイルズオブテニヌ

2010年10月12日06時49分発行